

平成22年 6月21日現在

研究種目：基盤研究（B）海外

研究期間：2006～2009

課題番号：18401016

研究課題名（和文）モンゴルの白樺樹皮文献と白樺樹皮文化に関する調査研究

研究課題名（英文）Research and study of birch bark manuscripts and the culture of birch bark of the mongols

研究代表者

井上 治（INOUE OSAMU）

島根県立大学・総合政策学部・教授

研究者番号：70287944

研究成果の概要（和文）：モンゴル国中・西部と中国新疆で発見された白樺樹皮上のモンゴル語テキストのうち、モンゴル国中部出土のものには、より南のモンゴル人居住域との関連があり、同国西部と中国新疆発見のものには西部モンゴル人特有の文字的特徴が看取された。テキストの大抵はモンゴル人に膾炙した仏典や民間信仰関連のものであり、それらは新疆一帯のモンゴル人の間に現在も伝わっている。しかし樹皮が出土した一帯の白樺林は衰え、モンゴルでの白樺樹皮の生活利用は北部一帯にわずかに残っているにすぎない。

研究成果の概要（英文）：This research examined the Mongolian texts written on birch bark - namely the ones discovered in the central and western part of Mongolia, and ones found in Xianjiang, China. The texts excavated in the central Mongolia were found to be relevant to the Mongolian residential area in the southern part, while the texts from the western Mongolia and Xianjiang showed some features of the Mongolian letters unique to the western Mongolia. Most of the texts concern folk belief and the Buddhist scriptures which are widely shared by Mongolians, and they are still preserved among the Mongolians in Xianjiang today. Yet the birch forests have been in decay around the sites where these texts were discovered. In Mongolia, the use of birch bark for everyday life faintly remains only in the northern part now.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2007年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2008年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2009年度	(1,870,000)	(561,000)	(2,431,000)
年度			
総計	9,100,000	2,730,000	11,830,000

研究分野：東洋史

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：中央アジア文献学、史料学、東洋史、言語学、民俗学、国際情報交換、モンゴル：中国

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、モンゴル高原中・西部発見の白樺樹皮モンゴル語文献の解読とテキスト内容の分析に、破損・崩壊のおそれのある新発見の白樺樹皮文献を至急研究し、少なくともつつある白樺（樹皮）使用の生活文化の実態を出土地点付近で緊急に調査して得られる知見を加味し、モンゴルの白樺文献と白樺文化の総合的研究を目指した。この背景として、研究代表者井上と研究分担者吉田は、民間財団の研究助成によって、モンゴル国中・西部出土の白樺樹皮モンゴル語文献の共同研究をモンゴル国のオチルらと行い今年度中に所期の目的を達成する見込みをもっていった。その一方で井上らは、白樺文献の研究を、文献学・史料学に基礎を置きつつも、なるべく広いモンゴル人居住地域を対象にもつ総合的な研究へと発展させたいと考えてきた。そのためには、モンゴル人居住地域の至る所から白樺文献が発見されることと、樹皮出土・発見地付近で失われつつある樹木使用の生活文化の実態を至急調査し、白樺樹皮を書写材として用いる各種根拠を得ることが求められる。しかし、これまで発見された白樺文献には限りがあり、資金の限界もあって新たな研究を展開できない状況にあった。しかし先頃井上は、知人である中国のエルデムトより、これまで発見例がなかった中国新疆ウイグル自治区北西部においてモンゴル文字白樺文献を発見したとの貴重な知らせを受けた。土中より発掘された樹皮は容易に破損・崩壊する危険があるので至急に研究を行う必要がある。この発見に力を得て、出土・発見地点における現地調査と、モンゴル語白樺文献研究の新たな可能性を提供するであろう新発見の資料の至急の研究を加えて、従来「モンゴル『国』中西部」に限定していた研究を「モンゴル『高原』中西部」に拡大し、白樺文献の総合的研究への発展を目指すために本研究課題を構想した。

2. 研究の目的

(1) モンゴル国出土白樺文献テキストの研究：すでに基本的な解読と分析を終えたモンゴル国出土白樺文献テキストの詳細な研究を行う。意味を明らかにするのみならず、書写されているモンゴル語・モンゴル文字の特徴から書写時期を確定し、可能ならば既存の文献・経典類と照合して同定を試みる。
(2) 新疆ウイグル自治区発見白樺樹皮モンゴル語文献の研究：新発見の白樺樹皮を実見調査し、現状保存のための写真撮影を行った後、テキストを解読・分析し内容を明らかにし、書写されているモンゴル語・モンゴル文字の特徴から書写時期を確定し、可能ならば既存の文献・経典類と照合して同定を試みる。

(3) モンゴル語白樺文献の地域間比較：(1)と(2)の結果を踏まえてモンゴル国と新疆の白樺文献を比較研究し、モンゴル中部・西部・新疆の間で、内容、言語、文字、書写時期、同定し得た文献・経典名の間にもどのような異同があるのかを明らかにする。

(4) 白樺に記されたテキストの流布・残存状況の把握：現地調査対象地域において、井上らが解読・分析・研究した白樺テキストが実際に流布し、現在も民間や寺院に残っているか、あるいは過去に存在したかを調査・把握して、その民間性と宗教性を明らかにする。またテキストが現物・口碑として残存している場合にはそれを記録にとどめて(1)～(3)と同様の方法で研究を行う。

(5) 新たな白樺樹皮文献の発見：本研究課題では考古学的発掘を行う予定はないが、地表に露見している樹皮があれば逐一採集し現状保存のための写真撮影を行う（現物は海外研究協力者が保管）。また、民間人が白樺樹皮文献を保管しているとの情報がモンゴル国・新疆それぞれにある。発見された場合には、所有者の許可を得て現状保存のための写真撮影を行う。このようにして得られた白樺文献については(1)～(3)と同様の方法で研究を行う。

(6) 白樺文献出土・発見地の樹皮文化の記録：モンゴル・新疆のモンゴル人居住地域において急速に失われつつある白樺樹皮への生活利用の現状を調査し、樹皮の採取・加工方法をその場で記録に残す。さらに現在は実用されていないが過去に存在した白樺樹皮の生活への利用方法、とくに白樺樹皮を加工して紙代わりに用いた古老の経験・記憶を記録し、可能ならばそれを再現してもらい、記録にとどめる。

(7) モンゴルと新疆のモンゴル人居住地域における白樺にまつわる風俗習慣の記録：樹木とくに白樺に対する崇拜、白樺を用いる祭祀、白樺に関する説話の類などの有無を確認し、記録にとどめる。

(8) 現地調査地点近辺における白樺の分布状況：現在、モンゴル人居住地域では白樺が著しく減少しているとの情報を得ている。モンゴル人の白樺（樹皮）利用の現状と白樺の減少との間には少なからず関係があると考えられるので、現地の白樺の現状を把握し記録に残す。

(9) 中国東北地方の少数民族地域における白樺使用の状況：モンゴル同様、中国東北地方の少数民族もごく最近まで白樺樹皮を盛んに生活に利用していたという。しかし、最近では山林を離れて平野部に定住する傾向が強まっていることから、樹皮の生活利用も少なくなつてゆき、モンゴルにおける白樺文化の研究に有用な比較材料を失うことが懸念

される。これに鑑み、中国東北地方少数民族の白樺利用の現状を調査する。

3. 研究の方法

本研究課題で採った研究方法は、井上と吉田、そしてモンゴル国のオチルとアルタンザヤー、中国のエルデムトの計五名による白樺樹皮上のモンゴル語テキストの精読と、樹皮出土地点ならびに今日でも白樺樹皮を生活に実用していると思われる地域での現地調査であった。

テキスト精読は第一年目と二年目に集中させたが、採択期間中の時期を費やすこととなった。現地調査は第一年目に北京の研究協力者が所有する新疆出土の白樺樹皮の写真撮影を行った。第二年目にはモンゴル国の二つの出土地点と新疆の西北部での現地調査を夏期に実施した。第三年目にはモンゴル国での追加調査として同国北部のブリヤート人居住地区での調査を五月に実施し、夏期には中国東北地方（内モンゴル自治区フルンブイル地方）での調査を行ったが、途中で研究代表者が負傷し、調査を中断した。この中断した調査の残りは、期間延長が認められた第四年目の夏期に確実に実施した。

4. 研究成果

(1) モンゴル国出土白樺文献テキストの研究：本研究課題で扱ったモンゴル国出土の白樺文献は、二つの箇所からの出土物である。第1は、オプス・アイマはブフムルン・ソムのタヴァグチン・オラーンというところで出土したものである。第2は、ボルガン・アイマはダシンチレン・ソムのハルボハ遺跡からの出土物である。我々研究グループは、申請時点ですでにこれらの基本的な解読と分析を終了していたが、本研究の過程で精密に撮影された写真ならびに赤外線撮影による写真によってあらためて仔細に至る解読を試みた。我々が扱ったモンゴル国出土白樺樹皮文献には、i) その面の文字だけなら問題なく解読できるもの、ii) その面の文字が破損・汚損・摩耗劣化のために完全に解読できないもの、iii) 樹皮が壊れて小さな断片になっておりいくつかの単語しか確認できないものや何らかの単語の綴りの一部しか確認できないもの、といった状態にある。本研究課題では、テキストの正確な読みを可能な限り確定することによってはじめて進展する部分が多いため、精密な写真による再解読に多大な時間を費やした。しかし、研究の対象である樹皮のほぼ半分が ii か iii の状態にあり、確定未了のため暫定的な読みを提示したり、翻字までが精一杯の状態に終わったものが多く出た。したがって、樹皮にある一つ一つの単語の意味は確定できても、樹皮に記された文字全体を把握した上での意味の確

定にまで至らなかったものを多く残した。また、i や ii のように解読に大きな障害はない樹皮であっても、その樹皮に記されたテキストの前後の葉が出土していないために、その樹皮がいかなる名称のテキストの一部に相当するかを同定することも達成できないままに終わった。ただし、書写されているモンゴル語やモンゴル文字の特徴から、これらモンゴル国出土白樺文献の書写時期はおおむね 17 世紀中盤まではさかのぼれることは、一部の樹皮に 1648 年に作製された改良型モンゴル文字で西部のオイラド・モンゴル人が広く用いたトド文字の特徴が看取されることから間違いのないところである。樹皮のテキストの同定については、今後も継続する必要がある。これに一定の進展が見込めるのは、不完全な樹皮上のテキストを着実に同定したごく最近の研究成果に依拠できるからである。おおむね仏典、願文、民間信仰テキストという、モンゴル各地から出土している 16 世紀以降にかかる文字資料テキストの傾向に沿った内容のものがほとんどであろうと推測している。

(2) 新疆ウイグル自治区発見白樺樹皮モンゴル語文献の研究：新発見の白樺樹皮を実見調査し、現状保存のための写真撮影を行った後、テキストを解読・分析し内容を明らかにし、書写されているモンゴル語・モンゴル文字の特徴から書写時期を確定し、可能ならば既存の文献・経典類と照合して同定を試みた。結果的には、写真撮影とテキストの解読と翻字にとどまった。理由としては、新疆出土分は、いまだにクリーニングと修復がなされていない状態にあることを挙げておく。土がこびりついたものは、それが薄い場合には赤外線撮影によって土の下の文字を読める程度の写真を得ることができたが、厚くこびりついている箇所については文字を読み取ることができなかった。また、モンゴル国出土分と同様に小さな断片と化している樹皮が多かったことも、所期の目標を十分に達成することを妨げた。また、折れ曲がった樹皮の部分が文字を隠しているものがあり、これもやはり専門家による修復を経ないことにはその下の文字を読むことができなかった。書写年代は 16 世紀から 17 世紀のものと思われる。一部文字の綴りにトド文字の特徴かと思われるものがあるので、そのような樹皮上の文字は 17 世紀中盤に時間の上限を設定してよいと思われる。同定の結果についてもモンゴル国出土分と同様の理由に加え、完全な修復後にはじめて解読しうる部分を残したために不十分なままに終わったが、やはり近年の先行研究を参考に同定しうるものがあることを期待している。

(3) モンゴル語白樺文献の地域間比較：モンゴル中部・西部・新疆の間で、内容、言語、

文字、書写時期、同定し得た文献・經典名の間どのような異同があるのかは、解読と同定が不十分な現時点では確定的に述べることは難しい。しかし、テキストそのものについていうならば、我々研究グループが扱った白樺樹皮には三つの地域を通じて顕著に異なるものはないのではないかとこの感触を受けている。先行研究が扱ったハルボハ遺跡発見の白樺樹皮には、上述した“白樺法典”やトゥメド部（現在の中国内モンゴル自治区フフホト市一帯に存在）のアルタンへの礼賛文と思われるテキストが記されているところから、現在のモンゴル国中部の白樺樹皮テキストには、より南に位置するモンゴル人居住地帯との関連が認められる。オブス・アイマグのタヴァグチン・オラーン出土分には、上述した我々研究グループが研究した折本とそこに記されているトド文字の特徴を有したモンゴル文字の筆跡が確認された。これは、オブス・アイマグがトド文字を用いているオイラド・モンゴル人の居住地にあたることから、顕著な地域特性を示していると言える。また新疆出土分にもトド文字の特徴かと思われる綴りが若干であるが認められる。新疆もまたオイラド・モンゴル人の居住地域である。このことは、オイラド・モンゴル人を中心とした当地のモンゴル人がモンゴル文字を中心としながらも、トド文字を徐々に受け入れ用いつつあった状況が存在したのではないかと推測させるものである。本研究課題では、白樺樹皮に記されたテキストの地域間比較を試みたが、文字を書き付ける素材に関して、タヴァグチン・オラーン出土の樹皮に、墨を用いず、先端のとがったもので刻みつけたように記されたいくつかの文字が確認できた。これは、いわゆる「角筆文献」に近いものであろうかと思われたが、このようにして刻み込まれた白樺樹皮の実例がモンゴルからはさほどの量出土していないので、今後の実例の増加が待たれる。

(4) 白樺に記されたテキストの流布・残存状況の把握：モンゴル国ではタヴァグチン・オラーン付近でもハルボハ遺跡付近でも、白樺はおろか、一帯に広まった經典や願文・祭文に関する知識や伝聞をもっている者は存在しなかった。一方の新疆では和布克塞爾モンゴル自治県、額敏県、伊犁哈薩克自治州で得るところが多かった。この一帯には、住民の求めに応じてなされる民間の識字者による經典書写や誦經行為が現在も残っており、『金光明經』、『金剛般若經』、『八陽經』、『白傘蓋經』などがいまだに広く民間に伝わっており、これらの經典はおそらく我々が扱った樹皮にも書き付けられていると思われる。また、当地の民間には先祖伝来の献香儀礼書や占い書が原型のまま、あるいは新しく書写された形で残っており、これらもおそらく我々

が扱った樹皮にもあることと思われる。これは単なる推測ではなく、先行研究が扱ったハルボハ出土白樺樹皮テキストにも、そして中国内モンゴル自治区包頭市のオロンスム遺跡から出土した紙文書の中にも確認されているものがあることから、我々の扱った樹皮にもテキストが存在すると思われるのである。第三年度には、モンゴル国セレンゲ・アイマグのダダル・ソムとバヤン・オール・ソムを訪ね、そこで白樺樹皮を扱う人物を訪ねたが、經典類に関してはまったく記憶していなかった。また、中国内モンゴル自治区のフルンブイル地方に住む少数民族（ブリヤート・モンゴル人、バルガ・モンゴル人、ダウール族、オロチョン族、エヴェンキ族）の住む地域の調査をおこなった。この調査では莫力達瓦ダウール族自治旗の調査を終えたところで研究代表者が負傷したため、調査を完遂できなかった。ダウール族、オロチョン族、エヴェンキ族は固有の文字をもたず、仏教をほとんど信仰していないため、白樺樹皮に文字を書き付ける習慣についての情報を得る可能性はほとんどないと予想していたが、この年度についてはまさにその通りであった。研究代表者の負傷による現地調査未了を理由として繰越が認められたことから、第四年度に調査をやり直した。結果として、彼らのもとには白樺に記したテキストはなかった。しかし、ブリヤート・モンゴル人とバルガ・モンゴル人に対して、かつて家庭内やその周辺に存在した經典類を記憶しているかと尋ねたところ、ごく少数であったが『金光明經』、『金剛般若經』、『八陽經』、『白傘蓋經』、なんらかの祈禱書が人口に膾炙していたことを語る者がいた。

(5) 新たな白樺樹皮文献の発見：新たな白樺文献は得られなかった。新疆では、文字の記された白樺樹皮を所有しているという噂のある人物に接触を試み、閲覧に供する約束まで取り付けたが、調査期間中に当該人物からの提供を受けることはできなかった。一方で興味深い情報を新疆の禾木喀納斯モンゴル族郷と昭蘇県、内モンゴルの莫力達瓦ダウール族自治旗で得ることができた。禾木喀納斯モンゴル族郷では1940年代初頭まで紙の代わりに白樺の樹皮に文字の練習をしていたと証言したトゥバ人老婆に、昭蘇県では昔は白樺樹皮に文字を書いており白樺樹皮に書かれた經典を見たことがあると証言する老人に話を聞くことができた。また、莫力達瓦ダウール族自治旗では父祖の世代のものと思われる満洲文字が書かれた白樺樹皮を見たことがあるというダウール人の古老に、それぞれめぐりあった。当然のことながらすでに現物はなく、単なる記憶と目撃証言ではあるが、前世紀中葉まで白樺樹皮は書写材として用いられていたことや、白樺樹皮文献が存

在していたこと、満洲語を習得したダウール人が白樺樹皮に満洲文字を書いていたことに関する情報は貴重なものと考えてよい。

(6) 白樺文献出土・発見地の樹皮文化の記録：モンゴル国のタヴァグチン・オランとハルボハ遺跡周辺では、実際に機能している白樺樹皮文化は存在しなかった。白樺樹を使用している形跡も見られなかった。かろうじてオブス・アイマグの博物館で、かつて使用されていた白樺樹製の生活用具の展示品を見ることができたにすぎなかった。しかし、首都ウランバートルの歴史博物館に、おもに匈奴時代から元朝期にかけての白樺樹皮製品出土物が大量に保存されているのを実見した。それらは、弓袋、女性貴人の帽子であった。当然とはいえ、北・中央アジアでは古来より白樺樹皮が生活において実用に供されていたことがわかった。また、モンゴル人たちはごく最近になるまで白樺樹で各種生活用具を製作しており、そのような用具も大量に保管・展示されていた。モンゴル国北部ヘンティン・アイマグのバヤン・オールに住むブリヤート・モンゴル人が現在でも白樺樹皮で生活用具を作っていると聞き、その人物を訪ねたところ、ひとりの老人が最近になって父親が作っていた様子を思い出しながら器を作るようになったと話した。その老人に手元に保管してあった白樺樹皮で器を作ってもらい、その様子を録画することに成功した。この老人は古くは存在しなかったであろう化学接着剤を用いて仕上げていたことから、最近になって作り始めたことは確かであると納得させられた。老人は、彼が保管していた白樺樹皮を好みの薄さにするのに、手でむしり取っており、厚さに関する加工方法がわかった。また、白樺樹皮の採取を実演するよう求めたところ、早速山林に入って樹皮の剥離を試みたが、すでに樹皮採取に適した早春（四月ころ）をすぎた晩春に入っていたため、白樺の幹に十分な水分がなく、通常の樹皮採取はできなかった。この人物の剥離動作は、適当な幹の上下を刃物（のこぎり）で薄く切り込んで、その上下の切り込みを縦方向に結んで切り込む方法であった。また、ダダル・ソムでは、白樺樹皮をいぶしだしてその油分をあつめ、痔の特効薬として用いていると語る人物に接触できたので、早速それを実演してもらい、これも録画することに成功した。また、ダダルでは、家庭で白樺材の容器を保管している人物と会うことができ、そのものを見せてもらうことに成功した。新疆発見の白樺樹皮は和布克塞爾モンゴル自治県で発見されたが、ここでもすでに白樺樹皮を生活に用いることはなくなっていた。ただし、出土地点を北に進んだ地方の哈巴河県で現在も山林に入って白樺樹皮を採取し器を作っているというウリヤンハイ・モンゴル人が

いることを知り、哈巴河県の白哈巴を目指したが、調査が許可されず、訪問は果たせなかった。禾木喀納斯モンゴル族郷では、やはり現在も樹皮採取と器具作製に従事しているトゥバ人の中年男性に会うことができた。折り悪く、ちょうど山から下りてきたところであったが、彼が作ったという白樺樹皮製の器（乳製品入れ）を実見できた。引き続きこの人物との接触を図ったが、現地の公安当局から調査の中止を求められ、それ以上の調査はできなかった。樹皮ではなく白樺木材を用いた生活器具は、漢徳尕特モンゴル族郷や昭蘇県でくわしく調査することができた。我々が実見することができたもののほとんどは、どれも倉の中から埃をかぶった状態で引っ張り出されてきたもので、実用に供されているとはいいがたい状況であったものの、一部の家庭では白樺材の食品を置く器や杯などをいまも使っていた。また、訪問した新疆各地の博物館には、白樺樹皮や白樺材の器物が展示されており、とくに布爾津市と阿爾泰市の博物館では白樺樹皮製の器の展示品があることを確認した。新疆を遠く離れた内モンゴル自治区フルンブイル地方のブリヤート・モンゴル人やバルガ・モンゴル人もはや白樺樹皮を生活に用いていなかった。何人かの古老にたずねたところ、かつては乳や乳製品、塩などを入れる器、皿、盆、ゆりかごの部品、家畜を呼ぶための笛を作っていたことを記憶していると語った。なお、ダウール族、オロチョン族、エヴェンキ族はまだかろうじて白樺樹皮を生活に用いており、その模様を記録にとどめることができた。

(7) モンゴルと新疆のモンゴル人居住地域における白樺にまつわる風俗習慣の記録：どの調査地域にも、白樺そのものを信仰や崇拝の対象にしているところはなかった。樹木は信仰の対象とはなるが、それは、とくに大きく育った巨木、草原の中に屹立している一本木など、「特別な木」として認識される木ならば、樹種を問わず信仰の対象になるということであった。事前に得ていた情報では、ブリヤート・モンゴル人あるいはバルガ・モンゴル人が白樺を崇拝するのではないかと思われた。しかし、それは、当地にまだ残っているシャマニズム的崇拝儀礼において、生け贄を天に届けるための「はしご」のような役割を果たすために用いられていることに見て取れたにすぎず、白樺の木が何らかの理由で神聖視され祀られることは確認できなかった。白樺に関する伝説は、中国エヴェンキ族自治旗の南屯にすむダウール人老人が、1976年にホイというところのエヴェンキ人ダシセンゲーという人物から聞き取ったものを語ってくれたのが唯一のものであった。これは、すべて録音することができた。北斗七星と天女降臨に関する有名な伝説に白樺の発

生を組み込んだような伝説であった。

(8) 現地調査地点近辺における白樺の分布状況：本研究で扱った樹皮が出土した地点のうち、ハルボハ遺跡近辺には白樺を確認できなかったが、タヴァグチン・オラーン近くのブムルン河、和布克塞爾モンゴル自治県「ジュンガル城趾」近くの小川にはやせた白樺が確認できた。現在も白樺が確認できた2地点の内、和布克塞爾モンゴル自治県一帯では、1940年代に国民党軍が一帯の白樺をほとんど切り尽くしたという事柄を何度か耳にした。ハルボハ遺跡と白樺の関係については不明としておくが、タヴァグチン・オラーンと和布克塞爾モンゴル自治県「ジュンガル城趾」では、一帯に使用に足る太さの白樺がかつては生えていたと考えてよい。なお、本研究で扱った樹皮出土地点にはあたらないが、我々が調査に踏み込んだヘンティー・アイマグの山地や興安嶺北部にはまだたくさんの白樺があった。しかし、モンゴル国北部の白樺も伐採や山火事のために、やせた白樺ばかりであった。これは興安嶺も同様で、白樺の巨木は見あたらなかったが、ある程度の太さに達した白樺の幹には樹皮の剥離跡があるので、許可された範囲内で地元の人びとが樹皮を採取していることがわかった。

(9) 中国東北地方の少数民族地域における白樺使用の状況：モンゴル国でも内モンゴルのフルンボイル地方でも、現在、白樺樹皮製の器具が実用のレベルにあるとは言い難い状況になっている。しかしそれでもモンゴル国北部のヘンティー山脈や中国内モンゴルの興安嶺の白樺樹林では、樹皮をはぎ取った痕跡が確認できた。何らかの形で白樺の樹皮がまだ用いられているということである。モンゴル国北部バヤン・オール・ソムの老人は自らが作ったものが首都ウランバートルで売れると聞いていると語ってくれた。また、化学接着剤を一切使わずに白樺樹皮で器物を作ることのできる内モンゴル自治区オロチョン自治旗阿里河在住のオロチョン族老婆は製作した器物を土産物屋に納めている。いずれの場合も、白樺の樹皮で作った器物は実用からはかけ離れ、商品として彼らの社会に残り続けているということに他ならない。ただ、このようにして器物を作ることのできる人物は今後ますます数が少なくなることが予想される。バヤン・オール・ソムの老人は自分の技術を子供に教え、それでもって幾ばくかでも現金収入につながればよいと考えている。オロチョン族の老婆は自分の技術を自慢することは決してなかったが、くだんの土産物屋を経営している孫夫婦はぜひとも祖母の技を受け継ぎたいと思い、いま習っているところだと語った。かつては中国東北地方の河川で活躍した白樺樹皮の船はいまは博物館でしか見ることができないと思って

いたが、この土産物屋には作りたての船が置いてあった。実用からはかけ離れてしまっても、このような形でその技術は残っているらしい。土産物屋を切り盛りする若妻は、中国東北地方の白樺樹皮文化に関してかなり豊富な知識を有しているが、それは、夫婦揃ってそのような伝統的技術を保持している古老に積極的にアプローチし、残りわずかとなった伝統技術に直に触れようとつとめているからに他ならない。実用からかけ離れたとはいえ、正しく技術が伝承され続けていくことで、再び天然資源を用いて作られる器物がその価値を再評価されていく可能性をこの若夫婦に見て取った。大興安嶺深くに分け入り、トナカイを飼うエヴェンキ人のキャンプでは、白樺樹皮でものを作ることのできるのは、高齢の老夫婦だけとなっていた。老夫婦は我々にトナカイを呼ぶための簡単な作りの笛を作って見せたり、案内役の女性に指図して服飾に用いる「型紙」も白樺で作って見せてくれた。しかし、その老夫婦以外の中・青年たちは現代的な器物を用いるばかりでなく、自らの言語すらも話せない状況であった。中国政府の政策により、山中のトナカイ飼いたちは山を下り、定住生活に移りつつある。彼らの多くが移り住んでいるオルグヤというところには、白樺樹皮で作られた土産物がたくさん置いてある。やはり、実用から商品への移行が明らかである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

吉田順一、ヒシクテン旗の旅、日本とモンゴル、査読なし、119、2009、35-47

吉田順一、フルンボイル東部を訪ねて—モリダワール=ダウール族自治旗とオロチョン自治旗—、日本とモンゴル、査読なし、117、200、98-112

吉田順一、ブムルンとハルボハへ、日本とモンゴル、査読なし、116、2008、102-117

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 治 (INOUE OSAMU)

島根県立大学・総合政策学部・教授

研究者番号：70287944

(2) 研究分担者

吉田 順一 (YOSHIDA JUN'ICHI)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：70063716

(3) 連携研究者

()

研究者番号：